第６課　イエスは人々と交わられた

【暗唱聖句】

「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。」ルカ15:1、2

【今週のテーマ】

今週はイエスの伝道方法と、教会がイエスの伝道方法をどのように実行できるかを考えます。

【日曜日　キリストの方法だけ】

「人の心を動かすのは、キリストの方法だけが真の成功をもたらす。人間として歩まれた間、救い主はその人たちの利益を図られ、同情を示し、その必要を満たして信頼をお受けになった。そして「わたしについてきなさい」とご命令になった」エレン・G・ホワイト

エレン・G・ホワイトの解説を通して、イエスがなさった福音を伝える方法のモデルを知ることができます。それはまず、その人たちの利益を図ること、同情を示すことによって信頼を得ることでありました。そしてその後で、わたしについてきなさいとお命じになりました。このキリストの方法に従うなら、教会の働きもまず、人々の必要に答えることから始めなければなりません。地域の人々のニーズがどこにあるのか、注意深く探り、その必要にどのような形で答えていくことができるのかを考えていくことが重要です。イエス・キリストご自身、神であられたのに人と同じ姿になられました。それは私たちを理解し、直接交わられ、そして助け出すためでした。

【月曜日　失われ、見いだされ】

イエスが徴税人や罪人たちを迎え、一緒に食事をしていると、ファリサイ派の人々や律法学者たちが来て、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」（ルカ15:2）と不平を言いました。そこで、イエスは100匹の羊、失われた銀貨、そして放蕩息子の三つの有名なたとえ話を語り始めます。この三つのたとえ話で共通しているのは、神様にとって大切な人が失われてしまったということから始まっていること、しかし、最後は見つけ出すことができ、祝福と喜びに包まれていることです。

 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。15:5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、15:6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。 15:7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」ルカ15:4～7

百匹の羊のたとえ話で前提となっているのは、わたしたちは皆神様の羊であることです。ところが、その羊を見失ってしまうのです。これが神様の視点から見てわたしたちの姿なのです。小さな子どもが迷子になったなら、親はどんな気持ちでしょうか。必死になって探し回ることでしょう。子どもは自分が迷子になったことを自覚するまでは、平気で動き回っています。親は子どもが行きそうな思い当たるところを探し回ります。見つけ出すまでは決してあきらめたりはしません。神様も同じなのです。そして、見つけたら、その羊を担いで帰ってくるほどうれしいのです。そして、聖書は「悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」と続けます。いかに神様は失われた魂のことを思っているかがわかります。教会も、この神様と同じ気持ち、同じ視点から失われた魂に目を向けなければなりません。

【火曜日　罪人と一緒に食事をする】

「イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。9:11 ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。9:12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。9:13 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」マタイ9:10

イエスの関心は、滅びに向かっている人、キリストを必要としている人たちに常にありました。ところが、ファリサイ派の人々は、救いを必要としている人のことよりも、宗教上の形式や儀式のほうを優先させました。わたしたちの関心はいつもどこにあるでしょうか。滅びゆく魂の上に注がれているのでしょうか、それとも教会の原理原則がそれよりも優先されるでしょうか。

ところで、イエスは三つのことを言われました。一つ目は「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」という言葉です。医者はイエスご自身、病人は罪人のことです。つまり、イエスはいま自分を必要としているのは、罪人であると言われたわけです。二つ目に、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」と言われました。これはホセア6:6からの引用です。「わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない」（ホセア6:6）。主が求めておられるのは憐み、慈しみです。もし、憐みや慈しみなく、いけにえや犠牲、つまり宗教的儀式だけをどんなに立派にささげたとしても、主はそれを喜びません。三つ目は「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われました。主が来られたのは、罪人を招くためと言われました。

さて、罪人とは誰のことでしょう。誰がイエスを必要としており、誰がイエスの憐みを求め、誰のためにイエスは来られたのでしょう。それはわたしのためだとわかったとき、イエスの言葉の中に込められた私に対する愛がしみ込んできます。そして、わたしたちもまた、憐みと慈しみの心を、まだ救われていない人々の上に、何よりさきに向けていかなければならないことを覚えなければなりません。

【水曜日　賢く交わる】

私たちは地の塩として交わらなければなりませんが、賢く交わらないと、この世の影響を受け、塩気が奪われてしまうかもしれません。聖書の中にも、その様な実例がたくさん出てきます。

ロトの物語では、アブラハムと別れることになったロトとその家族が世俗化されていく光景を見ることができます。ロトはアブラハムと別れなければならなくなったとき、神に問うこともなく、見た目に潤っていた地域を選びます。

「ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った」創世記13:10、11

しかし、ロトが選んだ地域の住人は主に対して多くの罪を犯していたため、やがて神の裁きがくだることになります。アブラハムのとりなしの祈りによって、ロトとロトの家族には救いの手が差し伸べられるのですが、ロトの子どもたちは、神の裁きが来ることなど信じることができず、馬鹿にするのでした。その結果、ソドムやゴモラの住人たちと共に、滅びていくことになります。

「イスラエルがシティムに滞在していたとき、民はモアブの娘たちに従って背信の行為をし始めた。25:2 娘たちは自分たちの神々に犠牲をささげるときに民を招き、民はその食事に加わって娘たちの神々を拝んだ。25:3 イスラエルはこうして、ペオルのバアルを慕ったので、主はイスラエルに対して憤られた」民数記25:1～3

わたしたちは自分の信仰をしっかり持っていないと、この世の影響を受け、引っ張られてしまうかもしれません。イスラエルの民は異教の人々と交わる中で、自分たちの信仰を証するのではなく、彼らの信仰に興味を示し、神様の怒りを招く結果となってきました。わたしたちもいろいろな宗教や文化、環境の中で交わるとき、一つひとつの行為を吟味し、軽く考えないようにする必要があります。そして、聖書の教えに反することであるならば、そこから離れることも大切です。

「なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです」第一ヨハネ2:16

「彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった」人類のあけぼの

もともと人間は欲望を完全に理性下においていました。そして、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福でした。罪の結果、逆に欲望に支配されるようになってしまいました。聖霊の助けなしに、この欲望に勝利し、清い思いをもって生きることができません。

【木曜日　よこしまな時代の中で】

「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。2:14 何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。2:15 そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、2:16 命の言葉をしっかり保つでしょう」フィリピ2:13

わたしたちが生きているこの時代は、よこしまな曲がった時代であると聖書は言います。しかし、それゆえに極端に内向的な守りの信仰態度に陥ると、地域社会との接点を失ってしまいます。そのような中にあって大切なことは、神の御心を祈り、不平を言わず、もくもくと行っていくことです。そうすればとがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝くようになると聖書は約束しています。

三つの教会のタイプ

①近隣社会の中にある教会…内向き志向が強く、地域との接触をほとんど持っていない。

②近隣社会に向いている教会…地域に向けて働きを起こっているのですが、地域の必要を調べず、自分本位の働きをするため、的外れなことがある。

③近隣社会と共にある教会…地域の必要を調べ、地域の指導者と交わり、的を得た奉仕をすることで、地域から信頼を得ている。